結構難しい漢字が出てくるが、1年生でもどんどん読んでしまう。それに、俳句や詩も季節や身近にあるものを選んでおり、五七五の調子やリズムの良さもあってかたちまちの内に暗記をしてしまう。

子供達が家に帰り、孟浩然の「春眠暁を覚えず・・・」や論語の「子曰く、過ちて改めざる、是を過ちと謂う。」と平気で諳んじている。それを端で聞いているお父さんやお母さんがびっくりして教科書を一緒に見るという。

これらの内容の理解はさておいて、先ずは音読させ、暗唱させる。日本語の響きやリズムの美しさを味わうことに主眼を置いている。

高学年の父兄は、低学年の教科書は給付されないので、わざわざ自費で購入される方も多く、全国からも問い合わせがあって1万冊が一般販売された。

さらに、中学生になると「日本語」の教科書ではなく、「日本文化」「表現」「哲学」の教科書になる。教科「日本語」の中に「哲学」の項目が設けられている。「道徳」ではなく、「哲学」であって、ここでは、人生観や道徳観、社会観などを育成し、深く考える力を養う。やはり古典や著名な作家の名文が使われている。

この授業を受けた生徒の感想が東京新聞に「授業3時間で変わった自分」と題して掲載された。

『「日本語」「哲学」、それを聞いてつまらなそう、と思った。（中略）でも、たった3時間だけの授業を受けて変わった私がここにいた。自分でも感じられるほどだから、すごい変化だと思う。「考える」というのは勉強するときだけ使っているものだと思っていたのだが、それだけが「考えている」のではないと初めて知った。（中略）人間だけが手に入れた言葉というものを、これからも大切にしていきたい。』

教科書の内容も濃く、小中の9年間のカリキュラムも素晴らしい。3月に新学習指導要領が告示された。その中でも思考力・判断力・表現力を育む観点から、国語科を中核とした言語活動の充実の必要性が説かれている。

現在、全国から世田谷区の取り組みが注目をされている。三芳の教育を考える上で大いに参考になると思われる。

※5月12日世田谷区教育委員会事務局副参事の直田益明（なおたますあき）氏にお聞きしました。